

タスクマスター (Taskmasters) : 他人に仕事を割り振るだけで、自分は何もしない管理職

著者は「モラル・バイオレンス (精神的暴力)」という言葉で、こうした仕事の本質を突きます。高い給与や社会的地位を得ても、「自分は何も生み出してない」という空虚感に苛まれる——これが問題なのです。

■商業教育が抱えるジレンマ

本書を読みながら、私は居心地の悪さを感じました。それは、私たちの教育が知らず知らずのうちに「BSJへの適応訓練」になっていないか、という懸念です。

たとえば、形式的な稟議書の回し方、実態の伴わない報告書の作成、前例踏襲のための手続き。これらを「ビジネスマナー」として教えてはいないでしょうか。生徒の「なぜ?」という問いに、私たちは蓋をしていないでしょうか。

グレーバーは、エッセンシャル・ワーカー (ケア労働、教育、製造、ゴミ収集など) が低報酬で、無意味な仕事ほど高報酬という「逆転現象」も指摘します。生徒が「やりがい」より「安定した大企業の管理部門」を選ぶのは合理的です。しかし、その先に待っているのが「高給な虚無」なら、進路指導は再考が必要です。

■「ブルシット」は本当に不要なのか?

ここで考えたいのは、BSJが本当に不要なのかということです。効率や利益だけを求めた機械的な業務だけでは、人は生きていけないのではないのでしょうか。AIやシンギュラリティが仕事を奪うと言われる今、BSJこそ人類の最後の希望——そんな見方もできます。

起業の本質は「ゼロから1を生み出すこと」。課題を解決し、価値を提供することです。しかし、人が関わる以上、非合理的な思いや感情を無視してはいけません。

■おわりに

『ブルシット・ジョブ』は、一見すると労働への絶望の書ですが、裏を返せば「人間は本来、意味のあることをして他者の役に立ちたいと願う生き物である」という希望の書でもあります。

あなたにとって、仕事の意味とは何でしょうか?

「ブルシット・ジョブ」は完全に無駄なのか、それとも人として必要なのか——ぜひ本書を読んで考えてみてください。

大阪ビジネスフロンティア高等学校
商業科 堀 学武